

酉年の思い



胆振西部医師会
聖ヶ丘病院

上原 総一郎

元旦の朝は地元の神社でお参りが通例である。この頃は少ないかもしれないが、結婚式・新築・子どもの七五三などのお宮参り、厄払い、生きている時の節目は神社、葬式などあの世の話の時はお寺である。神社といえば、大和の山辺の道を天理から大神神社まで歩いた。みかんの木が散在する田んぼ道や周囲の祠や御陵の周りは、何遍来てもいいなと思った経験がある。邪馬台国の卑弥呼の墓に擬せられる大市の墓を巡り、精水わき出て、あまたの製薬会社の石柱が並び、三輪山の登山口のある狭井神社を歩くと、和魂を祭る大神神社よりも、鎮花祭、射礼の神事があり、荒魂を祭る、狭井神社が原初の三輪山を祭る、卑弥呼に（邪馬台国大和説の私としては）関わりある神社では、と勝手に思いたくなる。九州の吉野ヶ里遺跡は、どうも邪馬台国大和説のガチガチ頭の私には、この遺跡に今一つピンと来ない。

最近の考古学で、古墳時代の始まりを3世紀中頃、かの魏志倭人伝の邪馬台国卑弥呼の時代に置く。最古の前方後円墳と目される大市の墓を卑弥呼の墓とする論者も多い。その後続く古墳時代の大王墓（天皇陵）と目される巨大古墳が多いのと、築造年代が10～20年単位で分かるようになると、巨大前方後円墳の築造年代が重複してくる場合が出てくる。その主である天皇＝大王権力者は大首長たちのトップであって、複数いたのをどう考えるべきか。また古墳の形、基段の築造、前方と後方の高さなど、古墳の築造構造の研究の進歩からは築造に2～3系列を認めるとする説がある。

文献的には魏志にあるように祭祀を司る王卑弥呼と、その男弟が実際の政治を行う聖俗二体制の存在がある。さらに問題がこんがらがらるのに、後代の文献の古事記・日本書紀（記・紀）と中国・朝鮮の文献との間における年代のズレがあり、120年を引き延ばしているが、この紀年を延ばすことが何のためかについて、その全容は解明されていない分野の一つである。もし卑弥呼の国初以来、大王天皇位に聖俗二主がいた、あるいは聖俗分離されていたとするならば、その対応例として、記・紀に出る日継ぎのミコトに対するアメノシタ・シロシメスみことがあるのでは。

3～5世紀の古墳時代から、ひょっとして聖徳太子の時代まで聖俗二体制が存在して、つまり同時に二人の天皇（後に称号としての）が並立していたならば、巨大古墳が多くてもよい、築造時期が重なっ

ても、築造形式が異なっていたとしてもうまく説明ができる。

これを後世の奈良時代に（当時、世界最先進国の中国から輸入した社会制度の律令制と仏教を本に、国作りをしたいがために）万世一系の天皇として国を作ったと。記・紀作成の書き手の手元には魏志ほか、当時手に入る文献はほとんどあったにも関わらず、まとめ上げられた記・紀の系譜では除かれ、作られた存在もあったかも、そのため紀年をひきのぼしているのではないか。国初の卑弥呼、私は彼女こそ最初の倭国王＝天皇の始まりと考えるが。それ以来、魏志では卑弥呼の死後に男王が立つが国が乱れたため、宗族の台与を祭祀王とした。その後は不明であるが、聖俗二体制が続いていたなら、意外に女系で天皇制は万世一系ではとも考えられないだろうか。証明はないが、制度がそう簡単に崩れたとも思えない。国初の聖俗分離の体制はどうなったのか。その後の日本の歴史をaboutに見れば、独裁的支配者が出て、祭祀上の権威者としての天皇が存在する二重体制が現在も続いている。戦後の憲法下では、祭祀の部分が抜けている。近時の天皇ご退位の問題にしても、ご高齢だけでは済まされない、国初以来の問題が控えている。

ままたそれはそれとして、こうなると、日本は最も早くから、聖俗分離がなされた政治的先進国で、聖俗分離、さらにもっと広げれば、世間的に意味での表と裏、本音と建て前、等々、もっとよく言えば伝統的日本流の考えとでも言おうか。だから、宗教的対立による世界的な問題の解決（？）をうまく避けていけるような遺伝子を持つわれわれ日本人は、これで結構幸せなのか、それともお前の立論は的外れか。

この頃の毎日を賑わす内外のニュースを見ると、日本の常識は世界の非常識とっていたが、存外そうでもないかも。

1月の誕生日を待つまでもなく、聖俗体制ならぬバランス感覚をもって、それを邪魔する認知症を避けながら長生きしてみたいものである。